

## 保育所による公園利用の可能性と課題（２）－園児と保育者の環境評価を踏まえて－

下村一彦（東北文教大学）

### はじめに

本研究では、保育施設での公園活用の傾向（椎野 2017）や、公園活用に向けた課題の指摘（三輪他 2008）に関する研究を踏まえて、隣接するF公園（476 m<sup>2</sup>）の「公園愛護会」を担う企業主導型保育I園（F市）の取り組みに着目してきた。

前回の発表（2019 奈良大会）では、環境記録と園長・主任へのインタビュー調査を通して、I園の取り組みの意義と課題を整理した。意義としては、①衛生的で裸足でも遊べる安心感やそれによる未就園家庭や小学生の利用。②小屋（清掃用具入れ）の設置による遊びの拠点確保。③園と公園の境界線にあるフェンスの撤去とテラスの設置による公園への動線・中間領域の確保。④畑の整備による自然体験の継続性や多様性の充実。等、公園が保育環境としても充実したことがある。他方、⑤整備資金、⑥遊具の裁量権（既製品遊具のハザード除去）、⑦地域理解のたゆまぬ獲得が課題であった。

一般的に、園が公園管理を担うとなると、保育者の意識喚起（負担感解消）が重要になるが、I園に関しては、職員募集時点で公園愛護会（開園の2018年3月に先立つ2017年8月に設立）を担っていたことから、一定程度意識のある保育者が集っていたと想定される。ただし、実際に環境整備に携わり、そこでの保育をどのように感じているのか、加えて、保育者の環境認識と子どもの思いの一致点などを把握することは、I園によるF公園の環境整備にはもちろん、他園での公園活用への示唆にも繋がると考える。

そこで本発表では、「緑の環境プラン大賞（公益財団法人都市緑化機構）」受賞により進められた更なる環境整備（芝生化）の記録とともに、園児と保育者による環境評価を把握し、保育者の意識や、園児と保育者の環境への認識を整理、分析する。

### 研究の手法

（保育者への聞き取り・保育者による評価）

新型コロナへの配慮から、2020年8月～9月中旬に、グーグルフォームへの記名回答を依頼し、園長・主任を含む9名（16名中）から回答を得た。

（園児による環境評価）

園児 19名の最年長である年中児5名を対象とした。2020年9月24日訪問時、写真投影法にて「好きな場所」3カ所を聞き取った。

※公園の近隣住民・利用者による環境評価も計画していたが、新型コロナのため自粛した。

### 保育者への聞き取りのまとめ

#### （１）環境整備後の子どもに対する印象の変化

・「自然物ともしゃがんでじっくりと遊ぶ」等、自然物への関心の深まりに関する回答 3人  
・「公園に出たがるようになった」等、屋外へのアフオーダンスや過ごし方に関する回答 3人

その他に、公園の小学生への憧れ方に園児の「新たな一面」を感じた。泥んこ遊びや団子づくりをやりたがる小学生の多さに驚いた。等、小学生にも魅力的な公共空間となったことで、保育者の子ども観・理解の深まりを感じられる回答もあった。

#### （２）自身が公園で新たに行うようになった行動

・「虫になれた」という回答も含め、自然物への関心の高まりや畑・花壇の整備に関する回答 7人  
・地域の公園利用者への積極的コミュニケーション等の公共空間としての配慮に関する回答 3人

その他に、裸足で過ごす、危険なものが落ちていないか探すという、整備の成果を自身も感じるとともに意識の高まりを伺わせる回答もあった。

#### （３）自身が公園で行わなくなった行動

・「特にない（思いつかない）」が5人と最も多い。なお、占有する園庭の整備に取り組む他園への調査（本科研）では、子どもへの誘い掛け等、保育者主導の活動が減ったという結果が目立ったが、開園当初から見守りを大切にしていたI園の保育方針や園児構成等もあり、一概に比較できない。  
・「公園を使うときはなるべく端の方でやろう」「地域の方達の利用も増え、安全面を考えると保育者と一緒に鬼ごっこをする場面が減ってきた」など、公園特有の占有に関する回答が3人

上記3人の内2人は、前項目でも、地域住民利用者への積極的コミュニケーションを挙げていた。

#### （４）自身の保育観の変化

・「園庭だと、園内の子どもや大人だけで遊ぶ空間ですが、公園ならではの保育に可能性を感じています。より社会との繋がりを感じやすいと思います。」「公園なので、はじめはもっといろんな方が利用するであろうと多少の不安もあったが、実際にはそこを子育ての拠点の一つとしている親子同士のつながりの場としてゆるやかに優しく繋がっていると感じる。（中略）同じ地域で子育てをしているという開放的な公園コミュニティがあり、利用者にも保育園側にとってもいいことだと感じる」

等、地域との繋がりを改めて重視する回答 3人  
 ・「都心のビルに囲まれた環境で逞しく自然と触れ合えることが園庭でなくてもできることに驚きました。出たい時に外に出るというスタイルも家庭的で、それぞれの子どもの心に寄り添った保育ができています」という、保育者の意識次第で保育の質は保障できる気づきの回答 1人

その他では、自身の保育観に関してではないが、園長が、「公園が豊かになっていくことで、保育も充実し、心が豊かになった。実際、公園が、コンクリートから芝生に変わったときから、保育中にも保育者が子どもたちと芝生でゴロゴロしていたりし、目に入る色も生の緑で、ゆったりした気持ちで子どもに関わっているのではないかと思う。」と職員の保育（観）の肯定的変化を感じている。

#### （5）望ましい場所（5か所以内）と理由

※回答は合計 40 件。1 件のみの回答 3 件の掲載を紙幅の関係で省略している。

愛着があり休日も公園を素通りできないという園長の姿勢にも象徴されるが、上位 5 か所が、保育者が整備に携わった場所であり、主体的に保育環境を整備する意義を公園においても感じられる。

畑	9
芝生	8
砂場	6
小屋	5
花壇	5
水場 周辺	3

また、自然物のある場所の回答が多いのは、次項の望ましくない場所に既製遊具や鉄製品が多いのと対照的である。望ましくない理由に安全面が多く挙げられているが、好ましい「芝生」も、民間補助金を得てコンクリート空間を改修したことによる安全性の向上を理由に挙げる回答があるように、職員のハザード除去への意識は非常に高い。

ただし、安全面だけが自然物を選ぶ理由ではなく、全員が選択した「畑」において、子どもが「愛着」を抱いている等、変化や応答性、活動の継続性を保障することの有効性を保育者が感じている。

#### （6）望ましくない場所（5か所以内）と理由

安全 関連	滑り台	5
	ブランコ	2
	水場のタイル	2
	東屋の鉄製支柱	1
	棘のある木	1
	毛虫	1
今後の 課題 関連	平坦な地面	2
	木陰の少なさ	1
	土質	1

※回答は合計 19 件。場所以外を回答している 1 件のみの回答 3 件の掲載を紙幅の関係で省略している。2 項目の大分類は発表者によるものである。

上から 4 か所では、落下等の実際のヒヤリハット事例が理由として挙げられていた。その中で、滑り台周辺のコンクリートを土囊で覆う、水場のタイルはウッドデッキを拡張する等の対応を採っているが、滑り台とブランコに関しては限界がある。小学生など、園児以外の子どもであっても、誰かがブランコで遊んでいたら園児の安全確保の観点から見守りにつくルールの下、人的な対応に頼らざるをえず、園運営の負担にもなっている。

#### 園児の写真投影法調査のまとめ

少数への調査であるが、職員も望ましいと認識している拠点の有効性と自然物の豊かさを子どもの視点からも確認できる。

整備した拠点 (小屋・椅子など)	5
整備した自然物 (畑・柑橘樹など)	4
滑り台	2
ブランコ	2
ダンパーの玩具	2

なお、自然物に関しては、調査日の午前中

の活動（畑で紫蘇の収穫をしたり、柑橘樹の実をもいで食べたりした）も影響しているだろうが、食べられることやその匂いが理由となっている。

注目したいのは、滑り台とブランコという既製品遊具を選択した園児の理由が、「後ろ向きに滑る」「上体をそらして乗る」等、遊具メーカーの規定外の遊び方の面白さにあったことである。安全面の理由から望ましくないという保育者の認識を裏付ける形となっており、保護者の個別の付き添いを前提とする公園遊具を保育環境で活用する公園での保育の課題がより明確になったといえる。

#### おわりに

本発表の目的は、公園の環境整備に携わる I 園の保育者の意識を把握するとともに、保育者の環境認識を園児の視点からも検証することであった。

自身が整備した場所を望ましい環境ととらえ、子どもの姿にその成果を感じる保育者の回答に見られる環境整備への肯定的な姿勢は、公園という公共空間ゆえの人的交流も前向きにとらえ、占有回避という制約にも真摯に向き合う原動力となっていることが伺われる。ただし、保育者のハザードへの危惧は園児の認識（遊び方）からも裏付けられているだけに、公園を保育に活用する上での安全確保の方策を今後も検討する必要がある。

#### 付記

本発表は、科学研究費基盤研究(C)「就学前保育施設における幼児・保育者評価を通じた園庭環境創造モデルの構築」(課題番号: 18K02483/研究代表者: 石垣文) の成果の一部である。